

「教育・指導型」から「学習支援型」への パラダイムシフト

下山 節子*

『臨牀透析』発刊からの40年を辿ると、看護特集での主要な変化の一つは、「患者を教育する」「スタッフを教育する」という捉え方から「学習を支援する」へのパラダイムシフトである。どう生きるのかを決めるのは、患者であり療養する生活者自身であるという視点を踏まえ、医療者、看護師は意思決定を支援する立場であると変化してきた。また、看護スタッフに対しては、看護の専門職としてどう成長していくのか、何を学習するのかは学習者である看護師が主体となって決めることであることも重要視してきた。つまり、「教育・指導」の主体は誰なのかを問いつづけた40年であったと考える。

2023年6月、日本看護協会から「生涯学習ガイドライン」が発表された。人生100年時代の到来、SDGsの考えが策定の背景にある。その中心になるものは、「学習」という考え方であり、「教育」という概念の軌道修正が行われた。ガイドラインには、看護職への期待として「看護の使命遂行と変化への対応」が示された。その大きなポイントは、①自身の生き方を実現するための生涯学習であり自律的に学ぶこと②実践から学ぶ（経験学習：リフレクション）こと③「成人教育学」の考えに基づく支援として主体性を尊重することである。

この成人教育学については、20世紀後半に米国の成人教育学者マルカム・ノールズ（Knowles, M.S.）が、生涯発達し続ける存在としての人間理解と生涯教育の発展に伴う成人教育の必要性からその概念を示した。子ども対象の教育学（ペダゴジー pedagogy）が

* NPO 法人日本看護キャリア開発センター

「子どもを教える技術（art）と科学（science）」に対して、成人教育学（アンドラゴジー andragogy）は「成人の学習を援助する技術（art）と科学（science）」と述べている。この生涯学習という考え方が、本来の成人教育学の基盤であった。

しかしながら中々医療、看護の現場に定着してこなかった。医療者や看護管理者、指導者が中心となった権威的で一方的な関わりが「教育している」と解釈されてきたように思う。長い間、現場で多くのジレンマを感じてきたが、今回の「生涯学習ガイドライン」はその混んとした靄を晴らすような確かな方向性を示したと考えている。

「生涯学習ガイドライン」は、看護職の生涯にわたる学習活動を支えるための生涯学習の羅針盤である。『臨牀透析』の看護特集においても、学習支援に関連してリフレクションやコーチング、キャリア開発ラダー、リーダーシップ、目標管理などを多く取り上げてきたことは大きな意義があったと考える。また、透析患者等の慢性腎臓病をもつ人々は、いかにセルフマネジメントをするかが重要となる。その人らしく生きることを支援すること、その人の意思決定を支援することが看護の重要な役割でもある。

今回のガイドラインは看護師が専門職として自律し質の高い看護への貢献を期待するものであると同時に「病いと共に生きる人」への療養生活支援にも繋がるものである。自らが生涯学習者として自律することがすなわち、慢性腎臓病や透析患者を支援するということへと導く。『臨牀透析』40年を迎えた今こそCKD医療現場の看護師としてのあり様にさらなる期待をしたい。

参考文献

- ・公益社団日本看護協会著：看護職の生涯学習ガイドライン、公益社団日本看護協会発行、2023
- ・マルカム・ノールズ（Malcom S. Knowles）著、堀薫夫他翻訳：成人教育の現代的実践ーベダゴジーからアンドラゴジーへ、鳳書房、2002